

中国の大学生の大学院進学意識に関する研究

—北京の大学への調査結果から—

満都拉（東京大学大学院）

1はじめに

中国教育部によれば、2012年の修士課程進学志願者は165.6万人で、大卒者全数の680万人の約25%を占めているⁱⁱ。これは、約4人に1人の大学生が大学卒業後の進路として大学院進学を希望していることを意味している。大学院進学希望者が増加する背景には高学歴化が進むという大きな社会背景がある一方で、大卒者の就職難問題も確実に存在すると考えられる。大学生就職率は2009年の68%を底に、少しづつ回復しているが大体85%前後に留まっており、就職口が見つからない大卒者が年間100万人近くいるⁱⁱⁱ。

本稿は、大学生の大学院進学意識の実態を明らかにするものである。また、今日の若者にとって大学院進学とはいがなる進路であり、彼らが何を期待して大学院進学を選んだのか、大学院進学という進路は彼らの人生においてどういった位置づけとなるのか、などの若者の生き方を検討するうえでの基礎資料となるものもある。具体的には、大学院進学を選んだ理由などを中心とし、その前段階である大学生活と、将来イメージなども含めて考察を行う。そしてこれらの3要素を一連のキャリア発達プロセスと見なし、内在的な関連を明らかにする。

2方法

本研究では、半構造化インタビュー調査法を用いた。調査は2012年3月下旬に北京で実施した。調査の概要是以下のとおりである。

(1)調査対象

調査対象者は、北京の5つの大学（中央民族大学、北京郵電大学、北京化工大学、北京航空航天大学、中央人民銀行金融学院）の19名の大学院修士課程1年生である。

(2)調査項目

調査項目は「大学生活」、「大学院進学に向

て」、「将来イメージ」の3つの部分から構成されている。本稿では調査項目のうち、とりわけ大学院進学意識に直接関わると思われる「学部の専攻を決めた経緯」「大学院進学の理由」「将来就職する際に重視する条件は何か」の3点に限定して、結果を報告する。

3分析結果

(1)結果の概要

【大学生活】：学部の専攻を決めた経緯として「親や親戚に決めてもらった」（17人）、「幼いころからの興味だった」（2人）という回答が得られた。

【大学院進学に向けて】：大学院進学の理由としては、「大学院の学歴が将来の就職に有利だと思うから」「将来就きたいポストは大学院の学歴が必要だから」「学部生が従事することが多い、ハードな肉体労働から逃げるため」「個人の発展にとって、大学院という学歴は学部の学歴よりスタートラインが高いと思うから」といった就職をめぐる積極的^{目的}（9人）と、「周りがみんな大学院進学しているので自分もこう決めた」「大卒で就職を考えるのは辛かったので、大学院に入って少し余裕な時間を設けて考えたかった」「大学受験で失敗して名門大学に入れなかったので大学院進学を通してその夢を叶えたかった」など明確な^{目的意識がない}消極的^{目的}（10人）の2点に集中した。

【将来イメージ】：将来、就職する際に重視する条件は何かについて尋ねたところ、「会社の将来性やそれによる個人の発展空間」「収入」「働く場所」などの外的要素（14人）と「興味関心」「好きなこと」など内的要素（5人）が挙げられた。

(2)3要素の内在的関連

上述の3要素の内在的関連を検討した結果、以下の図にまとめることができる（図1参照）。

図1 3要素の内在的関連図

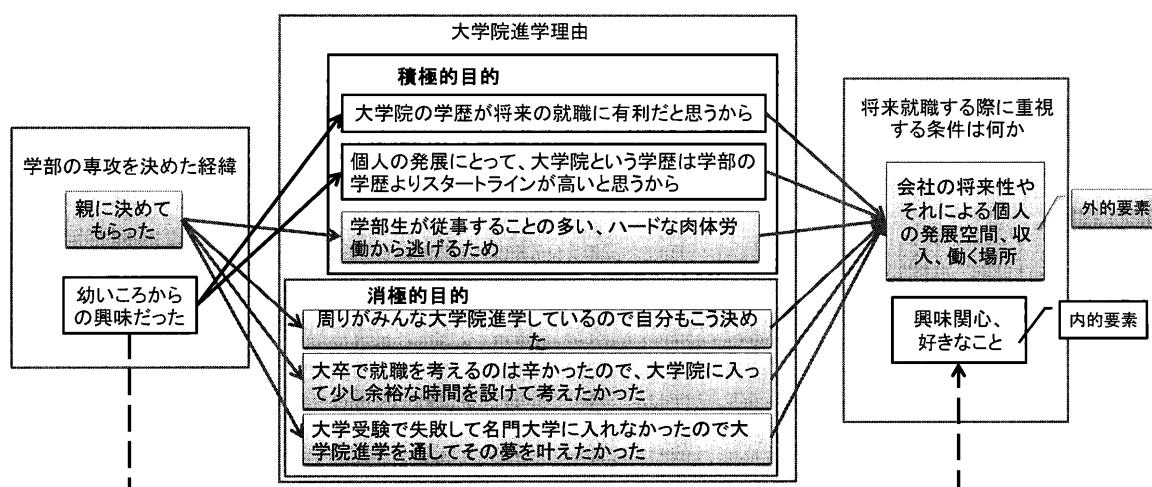


図1に示すように、大学院進学の理由には消極的因素が多く入っている者には、学部の専攻を親に決めてもらったり、将来への職業生活に関して、会社の規模や将来性、個人の昇進や発展空間、また仕事の待遇など職業をめぐる外的要素を非常に重視する特徴がみられた。一方、大学院進学の理由として就職のことなど積極的目的を持った者には、幼いころの興味関心で学部の専攻を決めたという特徴がみられるが、将来の職業生活については、前者と変わらず、職業の内的要素よりも外的要素を優先的に考えているといえる。

4 総合考察

以上を踏まえると、次の3点が指摘できる。第一に、中国の若者たちには、自分のことを自分で考えていくプロセスと、自分で決める意思決定力が欠けていることである。その背景には中国の地域格差がもたらす情報の格差問題と、1978年以降に実施された一人っ子政策や、そのもとで形成された親子関係、つまり親が子どもの身の回りのことを決める傾向などがうかがわれる。一方、大学入試の仕組みから見ると、中国では日本のような学部ごとの合格基準という決まりがなく、一般的に文系と理系の2つの範疇に分けられるのみである。そのため、大学受験の時点で具体的な学部を決める必要がない。これは、大学受験生にとって、どの学部へ進むのかをあえて考えなくてもいいような事態をもたらし、その結果、往々にして親や親戚に決めてもらうようになったといえる。第二に、1980年代の「大学進学」を契機に形成され広まった若者のエリート意識は、今日では「名門大学の大学院進学」といった形で再び登場し、ますます強まっていることである。これは從来から問題視してきた、「勝ち組」「負け組」で決着され

る詰め込み教育と受験勉強の影響がそのまま大学院教育へ移りつつあることを意味するといえる。中国の教育部は教育条例上、学校教育は人類が獲得・蓄積した知識を次世代に伝達・教授し、1人ひとりの「知・徳・体・美・労」の全面的な発展を目指し、学部段階は専門的素養や基礎的能力のある人材育成、大学院は専攻分野における研究者養成に加え、高度専門職業人の養成を担うべきである、と定めている。しかし本研究の結果に限つて言えば、こうした詰め込み教育とそれを受け形成された受験勉強の学習姿勢やエリート意識は、彼らに、学問の習得や社会において必要とされる実践能力、人間としての社会性の養成への重視ではなく、「名門」といった外的要素への志向を強め、その結果、名譽や点数、順番をもとに自己や他者を評価するような考え方を注入しているといえる。

第三に、将来の職業生活や就職志向においては、職業の内容など内的要素よりも会社の知名度や個人の昇進、待遇、場所など外的要素をより重視している。その背景には高度経済成長に伴う物価や土地価格の高騰、高等教育の有償化、また雇用環境の悪化による生活や就職のプレッシャー、さらに親世代の「我が子への立身出世」の期待の強まりなどがうかがわれる。

(詳細な内容は発表当日ご報告いたします)

主な参考文献

ⁱ 大学院進学志願者とは、大学院進学志願書の提出締め切り、つまり前年度の2011年の11月の時点での志願書を提出した者を指す。

ⁱⁱ http://kaoyan.jyb.cn/kysx/201205/t20120529_495072.html 2012/7/18 最終アクセス 中国教育ニュースレーダー>大学院受験>大学院受験速報>参照。

ⁱⁱⁱ <http://www.studentboss.com/html/news/2009-07-22/34344.htm> 2012/9/7 最終アクセス 中国教育ニュースレーダー>大学生就職>参照。